遊具・玩具のデザイン

斎藤公子

環境と保育

子どもは最良の環境で、最高のものを与えて教育したい、と願うのは私だけでなく、多くの教育にたずさわるかたがたの願いだと思います。

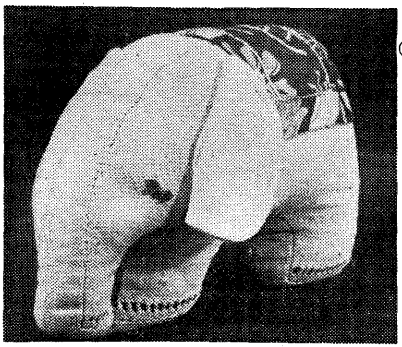
終戦直後のことです。遊ぶのに玩具なく、見るのに絵本なく、えがくのに紙もない、というみじめな時にすら、子どもたちは生れ、育っていた時、幸いにして九死に一生を得た若者たちが、次々と前線から故郷にかえってきて、わが家の焼あとに立ってこんなことを考えました。〝子どもたちにいいおもちゃを作ってやりたいなあ〟

わずか五、六人でした。年は二十四、五才のものばかり。どの若者も父母の愛にみちた仕合せな家庭で、美しいものに限りないあこがれをもって育った人たちでした。

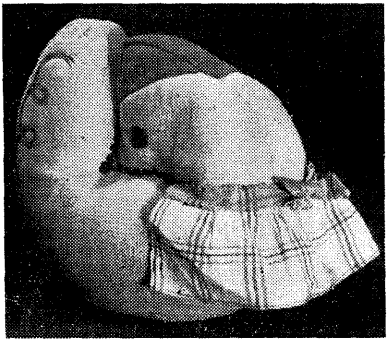
第一次世界大戦の直後に生れ、その後しばらくつづいた平和に、いろいろな意味の豊かさの中で幼児期をおえた者たちでした。

それぞれ希望を持ってはいった学校を卒業するとまもなく、あの大東亜戦争で、あるいは特攻隊にえらばれ、すんでのことに前途を失うところであった者もあり、長い飢餓の戦線からやっとかえって来られたものもあり、さまざまな生死の境を越えてかえってきたのに、今故郷の土をふむとすぐに、戦争の痛手は直ぐに忘れてしまって、子どもたちに美しいものを、と自分たちの生活のこともあとにするのは、やはり幸福な幼児期のせいであったろうか、と私には思われます。

ちょうどこの頃、保育の専門の勉強をしても、先生がこわくてなれず、自分の仕事をもきめかねていた私は、父が工芸家であったために、この人たちを知りました。そして〝子どもたちに良い遊具を、良い玩具を〟というこの人たちの仲にとびこむことになったのがそもそもの始まりで、ただ玩具を創造するだけではあきたらず、実際に私や仲間のつくった遊具、玩具を、子どもたちに生かして使わせたいと考えるようになり、あんなに恐れていた先生にとうとうなってしまいました。しかし、未だに幼い子どもを教える立場であることのむずかしさ、おそろしさに、いっそやめてしまおうかと何回考えるかわからないことですが、ちょうどこんな良い機会を与えられましたので、多くのかたがたから御批判をいただくことが出来たらと、勇気を出して筆をとることにしました。



①



②

さて、良い遊具、良い玩具を、といくら気張ってみても、どんなのがいいのか、いまあるのは一体どこが悪いのかを知らなくては、いいものを作り出すことが出来ません。

それから私は世界各国の良い玩具、遊具を紹介した本をさがすことと、デパートの玩具売場をのぞいてまわることが仕事になりました。なにしろ自分の生活を維持してゆくのさえ困難な時ですから、高い外国誌を買うことも、まして玩具の実物を買うことも出来ず仕舞で、今ここで御紹介出来ないのが残念ですが、数見てゆくうちに、玩具にもその国、その国の特徴があらわれていて、ああこれはドイツのもの、フランスのもの、アメリカのもの、チェコのもの、など一見してわかるようになったことです。(その頃私が見たものは今からみれば大分昔の本ですが)

例えば、ドイツのものは形ががっちりと、角ばっていて、いかにも力強く、色は茶褐色系が多く、フランスのものは優雅な線で、色は淡いブルー、ピンクなどが多く、アメリカのものはいかにもユーモラスで、色も黄、黒、赤にぎやかであり、チェコのものはドイツと感じが似ていてもどことなく民芸的な香り高さを感じる、といった具合なのです。私はだんだんにおもしろくなってゆきました。

玩具にもおのおのの民族の特性が出ている。そうだ、その民族のねがいもまたこめられているのだな、と私は感じたのです。

いい玩具というのは、今の世の中のように、玩具屋がただ、うりたい、うりたいと一心に作って、たくさん売れるからいいというのでなく、おとなが次の時代を背負う幼い子どもに、自分たちの、こんなおとなに育ってほしいという願いや愛情をこめて作るものなのだ、ということが何となくわかってきたのです。幼い者たちは無心に玩具で遊んでいるうちに、知らず知らずのうちにおとなの愛情と希望がしみこんで育ってゆくのだ、と思った時、私は新らしい玩具を作ろう、というものすごい意欲がわいてきました。

さて、私は玩具の仲間ではただ一人の女性であった関係から、布の玩具の研究を受けもつことになりました。他の男性は各自、木、紙、金属など受けもちました。

最も単純で最も完全な〝美しい形〟は円ではないかしらと考えた私は、子どもの好きな動物を円でデザインしてみようと思い立ち、

ねてもさめても、道を歩いていても、空に円をえがいて考えつづけていました。フッと出来上ったのが、写真①の象です。

そして形からばかりでなく、質感からも強さ、豊かさ、美しさを子どもたちに感じさせたいと考えましたが、当時は布地などどこにも売ってはいませんでした。やむを得ず、麻のテーブル掛をきってしまいました。背中の布は手描きの蠟けつ染です。中につめたものは綿も買えず、もみがらでした。

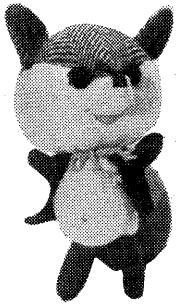
つづいて写真②のにわとりのお母さんをつくりました。写真にはありませんが、後のひよこをふりかえっているところです。

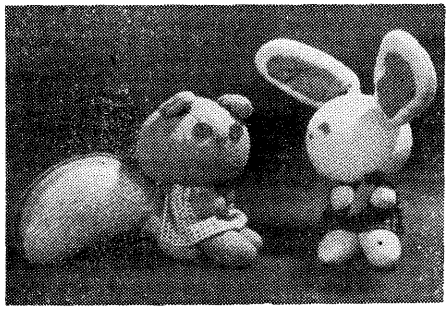
大きさはいずれも子どもたちが両手で抱えられるほどの大いさです。うまのりにもなれる強さが必要です。

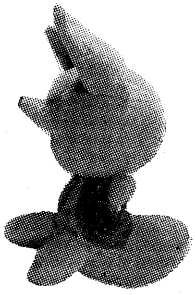
次に子どもたちの遊びを見てゆくうちに、子どもたちは動物たちをすっかり自分たちと同じ人間にあつかっているのをしって、作ってみたのが写真③④のうさぎ、りす、たぬき、きつね、ねこ、ぞう、くまの類です。これも質感を大切にして全部、厚地のウール地でつくりました。この頃もまだ布地は店ではもとめられず、洋裁店をまわってあるいて、残り布をまとめてもらってきて、その中からつかわれるものだけわずかえらび出して作りました。

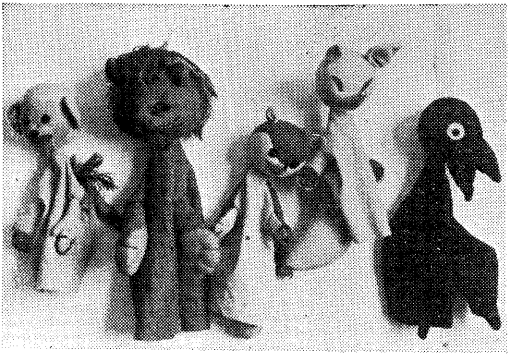
これらの中でくまは、首や、手足を自由に動かせるように作ってみましたが、長い子どものはげしい使用にたえないことを知って、次につくってみたのが、写真⑤のきつね、たぬき、らいおん、さるの人形芝居の出来る動物たちでした。これも大きさは子どもが全身で

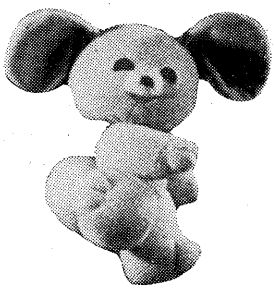
③





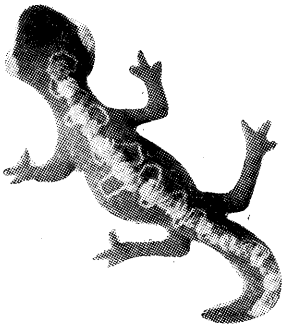




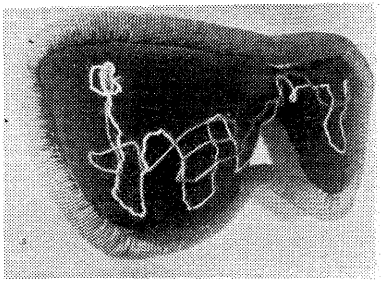


④

⑤



⑥



⑦

動かせるほどの大いさです。首には子どもの指でにぎれる太さの棒が入れてあり、棒をもって左右どんなにでも首が動かせるし両手を入れて劇あそびの出来る、この動物たちはもっともよい子どもの友だちになってしまいました。

これを作る頃はようやく純毛のオーバー地が出廻ってきた頃で、まだまだ値段は高いものでしたが、四分か五分ずつ切ってもらって作りました。一個の材料費だけで二、三千円もするこの動物を、〝まあもったいない、子どもたちに毎日いじらせておくなんて〟といわれるかたがありますが、子どもたちに使わせてもったいない、と思うことを知らない私にはふしぎですし、考えてみれば、もう四、五年も毎日ふんだり、たたいたり、投げたり、さまざまな目に合わされているこの動物たちが、まだ健在なところをみるとたいへん安い玩具でもあるわけです。

写真⑥は、子どものクッションに作ったビロード地の魚です。写真⑦は、子どもたちの気味悪がるいもりの類も、こうした玩具では、美しく表現出来て、やはり子どもたちに親しまれてきているものです。

遊具の方では、仲間の由良玲吉氏のデザインした、写真⑧の円のジャングルジムは如何でしょうか。実際に子どもたちに使ってみましたがくぐり抜けが容易で、しかも円型であることから、いろいろな幻想がわき、飛行機のハンドルなどにも模して遊んでいたり、据えつけなくとも安定性があって軽いので、室内、屋外どこにでも好きな場所に移動が出来て、子どもたちはたいへん喜びました。色

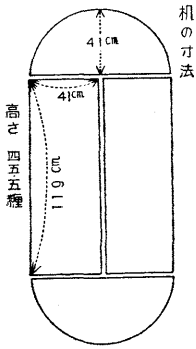
が、写真で見えないので残念なのですが、赤、黄、紺、淡いグレーのぬりわけで、実にきれいです。費用は私がつくった時は普通のジャングルジムより三割安位になりましたが。

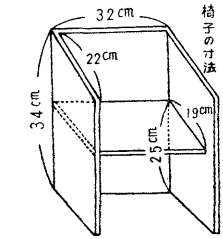
この他、今私のところで使っている子どもの椅子、テーブルは是非皆様におすすめしたいものです。やはり仲間の松本文郎氏のデザインです。高さが写真⑨のように五通りに使えますので、集会の折、子どもたちは劇場の椅子のような傾斜に並ぶことが出来、とても喜びます。

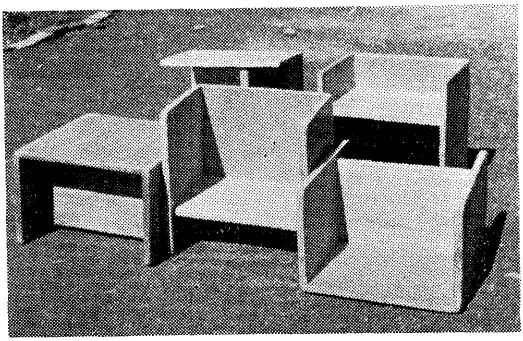
またこの形は一人ひとりの机がわりになることもあり、ゴム粘土など臭いが机にうつって困る場合はめいめい椅子の机をつかって床に坐ってたのしんでいます。これは積木のかわりに遊具としての精能もすぐれたもので、いろいろに組み合せて、汽車や（写真⑩）自動車、ままごとの家、ゆりかごなど、子どもたちは毎日工夫して遊びを発展させてゆきます。そのかわり材料はラワンを使って丈夫に作ってあります。子どもたちがかえってしまった後、この椅子は面白く壁につみ重ね、気のきいた棚にも早代りします。

遊具ではありませんが、ついでですからこの椅子と組になっているテーブルを御紹介します。

図のように半円二個、長四角二個で一組で、







⑨

⑩

⑪

この形の他にそれぞれ独立して使えると同時に、半円を二つ合せて円にしたり、長四角をもっとたくさん組み合せて端に半円をつけ、集会の人数によっていくらでも大きい楕円をつくることが出来て重宝しています。

なお、今手元にないのですが、やはり新しい仲間の風間靖子氏の作品で、ごく小さい年令の子どものための軽い大型積木があります。

紙を圧縮した材料でつくってあるので、とても軽く、まわりに白のビニール塗料をつかって、クレヨンで絵をかいたり消したりすることが出来るようになっているのがおもしろく、また形も円筒をいくつかいれたことから子どもたちの遊びを豊富にしました。

今庭の遊具でとても子どもたちに喜ばれているのに写真⑪があります。普通椅子が板の上に並べてあるのが多いようですが、こうした簡単な鉄棒のくぎりは、のりおりも簡単で大勢がのれて、少しの時はきくの下にくぐってねて喜ぶ子もあり、おりてこぐ時にもにぎるのに便利な高さで、子どもたちには遊覧船、遊覧船と呼ばれ人気があります。

これら庭の鉄製品の遊具の塗料の色ですが、この頃はずいぶん感じの良い色彩の塗料が使われているようで、うれしくなります。今までは銀色が多かったようですが、私はどうしてか好きになれません。この遊覧船も淡いグリーンに、鉄のさくをクリームに塗ってもらいましたら庭がとてもたのしくなり、傍の花壇の花の色ともよくうつります。

この他まだ仲者たちの良い作品がいくつかあるのですが、デザインは見たばかりでなく機能がすぐれていなければいけませんので、今後実際に使ってみることが出来る日をまっています。

すぐれた新らしいデザインの遊具、玩具が、もっともっと作られて、また私どもに紹介していただけたり、そして手軽にもとめられるようになったらどんなに嬉しいでしょう。

（埼玉県深谷市西島六八三の二　さくら幼児園）